

新たな視点で

九州工業大学名誉教授 渡邊 明

1. HOW TO USEこそ肝要

1970年、カリフォルニア大学のT.Y.LIN教授、B.C.GERWICK教授を訪ねた際、「アメリカの西部ではPCの構造物をよく見かけるが、鉄産業の盛んなニューヨークなど東部ではあまり見かけない。『鉄は国家なり』を標榜し、鉄産業が圧倒的な政治力を持っている日本で、PCがかくも躍進しているのは、正に奇跡だ。日本人は、新しい技術を創造するHow to makeの面では出遅れているものの、技術を使いこなすHow to useの面では世界的に高い評価を受けており、日本のPCの未来は前途洋々だ」と絶賛されたのは驚きで、その時の感動は今も心底に残っている。

さて、チェコのJ.STRAJKY教授が「PC技術は20世紀における構造工学上最大の発明だ」と述べたことは全く同感で、それはHow to makeの正に金字塔に違いないが、How to useの視点では道半ばで、PC技術はまだ利用未達の資源であると、筆者は思えてならないのである。

2. 価値を生み出す苦心

ところで、人情の機微・人生の哀歓を見事に紡ぎ、数多珠玉の名演・艶・援歌を世に送った、昵懇の作詞家故星野哲郎氏と歓談の折、「作詞のネタ探しに、酒に弱い体で、毎晩のように新宿歌舞伎町辺りに繰り出した。そして例えば、小林旭の『昔の名前で出ています』の詩は、新宿から大宮のバーへ移った女の子からの電話にヒントを得て出来たし、水前寺清子の『おしてもだめならひいてみな』は、バーに入ろうとした時にママが叫んだ言葉をそのままフレーズにした」とか、また美空ひばりの『みだれ髪』の作詞のために塩屋岬まで何遍も足を運んだ話などをされたが、正に粒粒辛苦、言わば、足で詩を書かれた実態が分かり、人の心を揺さ振る新しい価値とジャンルを生み出した、偉大な作詞家の「陰の苦勞」を重々識らされたのであった。

3. 視点を変えた追究

細胞の自食作用の仕組み(オートファジー)を解明し、ガン研究に新しい道を拓かれてノーベル賞に輝かれた東工大名誉教授大隈良典先生は、「自分は応用を重視しがちな一般の風潮にとらわれず、好奇心の赴くままに突き進んだ」と語られ、その事に関し、横浜薬科大学長江崎玲於奈先生は「ゴーイングマイウェイ的研究からすばらしい成果が生まれたのだ。私の分野でも真空管の周りばかりいじっていたら、ダイオードやトランジスタは生まれなかった」と述懐されていた。

ちなみに、過年、水力発電所の発電機への導水圧力管に遠心力PC圧力パイプを利用し、ウォーターハンマー用サージタンクを不要にしたドイツでの発想の大胆さに圧倒されたことが忘れ難く、また筆者自身も、以前、ケーブルトラスにプレストレスを入れるという発想で、橋梁の安全迅速施工法(PCT工法)を実用化させた経験があり、上記両先生のお言葉に学んで原点回帰し、コンクリートの周りばかり追っかけていないで、これまでの固定観念・既成概念にとらわれない路線を、星野哲郎流の熱心さと執拗さで邁進すれば、付加価値の高い、更にすばらしい用途面が拓けて、PCルネサンスが導かれるかも、と見果てぬ夢を改めて追う次第である。

終りに、滞米中にふと垣間見た格言を掲げる。

***INTELLIGENCE is not of much use,
unless you're intelligent enough to know
how to use it.***

知識は、それを使いこなす知恵がなければ
役に立たない(筆者迷訳)

なお、わが敬愛するイラストレーター山藤章二氏の珠玉の戯句

すすめ すすめ 勝手にすすめ

も掲げる。

INNOVATIONは、この延長線上にきっとある筈である。